

詩編 139 : 23～24

コロサイの信徒への手紙 3 : 5

「むさぼるな」(第十戒)

(ハイデルベルク信仰問答 十戒について 問 113)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編 95 : 1～2

【讚美歌】27「父、子、聖霊の」

【詩編交読】詩編 102 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55 : 7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】2「聖なるみ神は」

【祈祷】

【聖書】詩編 139 : 23～24

コロサイの信徒への手紙 3 : 5

【説教】「むさぼるな」

<しめくくりの戒め>

ハイデルベルク信仰問答から、「十戒」の戒めを一つずつたどり、聖書の御言葉を聞いてきました。「十戒」は、前半が、神さまとわたしたちの関係に関する戒め。また後半は、隣人とわたしたちの関係に関する戒め、が語られていました。

そして今日は、いよいよ最後の「第十戒 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない」という戒めです。

この戒めは、後半の、隣人との関係に関わる戒めの締めくくりであると同時に、十戒全体の締めくくり、ともなっています。

第十戒は、後半の、隣人との関係に関する戒めの中でも、特に特徴的です。

皆さんの中には、第十戒の「隣人の家を欲してはならない」というのは、もしかすると、第八戒の「盗んではならない」という戒めと、内容が被っているのではないか、と思われる方がいるかも知れません。

でも、第八戒を含めて、これまで、十戒後半の、隣人との関係に関する戒めは、「殺してはならない」「姦淫してはならない」「盗んではならない」「隣人に関して偽証してはならない」というように、具体的な罪の行為をあげて戒めていました。

でも、この第十戒は、「隣人の家を欲すること」。つまり、「欲しい」という心の思いそのものを戒めているのです。

わたしたちは、行為であれば、まだ、殺してはいない。盗んではいない。あれはしてない。これもしてない、と少し安心できるところがあるかも知れません。

でも、第十戒は、「欲してはならない」と言います。隣人のものを欲する思い。自分もそれを手にしたいという思い。あるいは、持っているけれど、もっと欲しいと思うこと。…そんな思いを心に抱いたことがない、と言える人が、一体世の中にいるのでしょうか。

第十戒は、わたしたちが、そのような心の奥底に眠る罪の根っこにまで、真剣に向き合うことを求めます。なぜなら、「欲する」という心の思いから、すべての罪は始まるからです。

### <むさぼりの罪>

さて、この第十戒の、「隣人の家を欲してはならない」との戒めは、昔の翻訳の口語訳聖書では、「隣人の家をむさぼってはならない」と訳されていました。この場合は、「むさぼる」の方が、内容をより正確に表しているかも知れません。むさぼり。食欲です。

「欲する」と言えば、ただ欲しがることですが、「むさぼり」、「食欲」という言葉には、欲深くものを欲しがると、飽きることなく欲しがると、際限なくやり続ける、というような意味があります。わたしたちの、飽くことのない欲望。際限ない欲求。それはまさに、「むさぼる」と表現するにふさわしいものです。

「隣人の家をむさぼる」。隣人が持っているものを、欲しがると。妬む。うらやむ。そういう思いが、食欲が、わたしたちの心の中に芽生えることがあります。

それは、時間をかけて、徐々に心の中で成長し、膨らんでいきます。そして、やがては、それらで心の中が一杯になり、わたしたちを支配するようになります。そこから人は、殺すことへ、姦淫へ、盗みへ、偽証へと、押し出されていくのです。

だから、ハイデルベルク信仰問答の問 113 には、こうありました。

「神の戒めのどれか一つにでも逆らうような、ほんのささいな欲望や思いも、もはや決してわたしたちの心に入り込ませないようにするということ。」

「ほんのささいな欲望や思い」も、わたしたちのあらゆる罪の火種になります。

ですから、その続きには「かえって、わたしたちが、あらゆる罪には心から絶えず敵対するように、とあるのです。わたしたちは、「むさぼり」の思いを心に抱くことのないように、食欲の罪に敵対し、戦わなければなりません。

でも、わたしたちは、どうして隣人に、そのような「むさぼり」の思いを抱くのでしょうか。どうして、自分が何かを得るために、あるいは、自分の思いが満たされるために、隣人のものを奪ってよい、隣人を傷つけてもよい、となってしまうのでしょうか。どうして、そのような、隣人との関係を壊してしまう、自分勝手な、自己中心的な思いが、わたしたちの内にあるのでしょうか。

<神さまをむさぼる>

わたしたちが、自己中心的であるということ。それは、わたしたちが、神さまを中心としていない、ということです。

わたしたち人間は、わたしたちをお造りになり、命を与え、生かし、養い、守ってくださる天の父なる神さまに、心も、体も、魂も、すべてを向けて、歩むべき存在です。神さまをすべての中心に置き、神さまの愛の御心に従って、歩むべきものです。

でも、わたしたちは、罪に傾いています。ですから、神さまに従うよりも、自分の思いに従いたい。神さまが望まれていることよりも、自分の願いが叶う方が大事。自分のやりたいように生きることこそ、自由に生きることだ。幸せだ。そう勘違いをしているのです。

そんな、わたしたち人間の罪のはじまりの物語が、創世記3章に語られています。

エデンの園で、アダムとエバが蛇に唆されて、「決して食べてはならない、必ず死ぬから」と、神さまに命じられていた、善悪の木の実を食べてしまうのです。そうして人間は、神さまの御言葉に背き、神さまとの良い関係を壊してしまい、エデンの園から追い出された、という出来事です。

さて、この創世記3章で、蛇は、神さまが食べてはいけないと命じられた、善悪の木の実を食べさせようと、エバをこのように誘いました。「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」。

つまり蛇は、「おまえは、この木の実を食べれば、神のように善悪を知るものとなる。神のようになれる」、と誘ったのです。

そして、アダムとエバは、それを望んだ。つまり、神のようになることを、欲したのです。

神のようになる。本当は、人間にそんなことは出来ません。しかし、人の中には、そうなりたいと願う思いがあります。

神になりたいと願う、ということは、自分の人生を、神さまのご支配の中で、神さまを主人として生きるのではなく、自分ですべてを支配し、自分が、自分の人生の主人でいたい、自分の思い通りにしたい、と願うことです。

そして、善悪を自分で決めることを欲する、とは。神さまがお示しになる、神さまご自身の正しさに従わず、何が正しいことで、何が間違っているかを、自分の基準で判断したいと願うことです。すると、神さまではないわたしたちは、自分に都合の良い基準で善悪を決め、自分勝手な判断を下し、それぞれに人を裁くようになります。

さて、こんな、神さまから離れた、自己中心的な人間同士が、争わないで、果たして一緒に生きていくことができるでしょうか。

本当は、命を与えてくださった神さまが、生きるために必要なものも、すべて備えてくださっています。そして、その神さまの恵みなくしては、わたしたちはひと時も、一瞬たりとも生きられない者なのです。

また、神さまを愛し、神さまの御心に従うところこそ。わたしたちは、神さまを愛すること、隣人を愛することを、自分のすべての基準として、喜んでそれを選び取り、本当の自由を、生きることができるのです。

しかし、罪に捕らえられた人間は、神さまの御許で、神さまに従って生きることを、不自由なことのようになってしまう。自分の思いに従って、自分の基準で選び、自分の力で生きることこそ、自由だと思い込んでいるのです。

でも、そうになると、わたしたちが選ぶ基準は、自分の利益を守り、自分を満たすことになっていきます。自由どころか、罪に、貪欲に、がんじがらめになっていきます。

そして、隣人とも軋轢を生み、傷つけ合い、共に生きることができなくなるのです。

…そして。このように、自分が神のようになることを欲する、ということは。このわたしを愛し、生かし、恵みによって支配し、正しく導いてくださる、神さまのことを、「いらない」ということに他なりません。

自分が神のようになることを欲する。それは、神さまの主権を、ご支配を、まさに神さまから「むさぼり取る」ということなのです。

この「むさぼり」によって、人は「十戒」の「第一戒 あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」との戒めを、破っていきます。

このように、「むさぼり」は、神さまとの関係においても、隣人との関係においても、深刻な罪の根っことなるのです。だから「十戒」は、この「むさぼり」の罪を、「十戒」全体に関わる重要な戒めとして、その一番最後に置いているのです。

#### <欲すべきこと>

では、わたしたちは、どのようにしてこの「むさぼり」の罪から逃れられるのでしょうか。どうすれば、「欲する」という思いを、心からすっかり追い出すことができるのでしょうか。

ここで注意したいのは、ハイデルベルク信仰問答は、わたしたちの「欲する」思いを、完全に消しなさい。無になれ。無欲になれ。禁欲的に、修行僧のように、一切の欲望を断ち切って生きよ、と言っているのではない、ということです。

注意深く問 113 の答えを読んでもみると、そこでは、「神の戒めのどれか一つにでも逆らうような」欲望や思いを、心に入り込ませるな、と言っています。

そして、信仰問答は、むしろ、わたしたちが欲すべきものがある。求めていくべきものがある、というのです。答えの最後の方に、こうありました。

「あらゆる義を慕い求めるように」なりなさい、と。

ハイデルベルク信仰問答の本文は、ドイツ語で書かれていますが、最初の「ほんのささいな欲望」の、この「欲望」という言葉と。最後の「慕い求める」の、「慕う」という言葉は、同じ単語が使われています。

信仰問答は、わたしたちの心に、欲する思いがある。求める思いがある。それは否定していません。

でもそれを、神さまの戒めに逆らう方向に向けてはならない。そうではなくて、「あらゆる義」を求める方向へ。つまり、神さまの正しさ、神さまの御心を求める方向にこそ、あなたの思いを向けなさい。神さまをこそ、欲しなさい、と言っているのです。

<イエスさまによって>

この「義」というのは、信仰問答に、これまでも何度も出てきましたが、罪人のわたしたちが、神さまの御前で「正しい」と認められること。罪を赦され、滅びから救われ、神さまに受け入れられて、神さまと共に生きる者になる、ということです。

もっと平たく言ってしまうと、神さまの愛を知って、神さまの救いの恵みを受けとって、罪を悔い改めて、神さまの方を向いて生きる、ということです。

神さまと共に生きることこそ、わたしたちの最高の、最大の、喜びであり、幸いであり、わたしたちが求めるべきもの、欲するべきもの、慕い求めていくべきものです。

かつてのわたしたちは、罪によって、神さまとの交わりから、離れていました。罪に傾いて、自分ではもう神さまに近づくことはできず、どうしようもありませんでした。そして、自分の欲するままに歩むことで、神さまとの関係を壊し、隣人との関係を壊してしまっていたのです。

そんなわたしたちの罪は、もう何をしても償えないほどに、自分の命をささげても足りないほどに、深刻でした。神さまの御前で裁かれたなら、有罪は確定であり、滅ぼされても仕方がないようなものでした。

でも、天の父なる神さまは、わたしたちが滅びることを、欲されませんでした。神さまは、わたしたちが、神さまと共に生きる者となることをこそ、欲してくださいました。わたしたちが、神さまを愛し、また隣人を愛して、共に生きることを、欲してくださいましたのです。

ですから神さまは、わたしたちに、神さまの方から、救いの道を拓いて下さいました。それが、神の御子イエスさまです。

イエスさまは、父なる神さまの御心に従って、わたしたちの罪を背負い、わたしたちの代わりに裁きを受け、わたしたちの滅びの死を、ご自分の十字架の死によって、引き受けてくださいました。

そして、イエスさまは死者の中から復活させられ、わたしたちの、すべての人間の罪と死に、完全に勝利して下さったことを、示して下さいましたのです。

この、イエスさまの十字架と復活の御業が、わたしの罪のための御業であったことを信じ、その恵みを受け入れるなら。わたしたちは、罪を赦された者とされ、正しい者とされ、「義」とされて、神さまの御前に立つことがゆるされる。罪から解放されて、イエスさまに無罪を宣言されて、安心して、神さまの御許に帰っていくことができるのです。

御子イエスさまの命さえも惜しまず、罪から救ってくださるほどに、神さまは、わたしたちを愛してくださっています。神さまが、わたしたちと共に生きることを、わたしたちとの良い交わり関係を築くことを、まず、欲してくださっているのです。

だから、わたしたちもまた、この恵みに生きることをこそ、欲したい。神さまの思いに逆らう、どんなささいな欲望も、思いも、捨てて。神さまの恵みをこそ、神さまとの交わりをこそ、心から慕い求めていきたいのです。

#### <神を礼拝すること>

そうして、わたしたちが、義を慕い求めて、神さまに向かって生きること。神さまと共に生きること。それは、まさに、神さまを礼拝して生きていく、ということです。

今日読まれたコロサイの信徒への手紙3:5には、こうありました。

「だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。」

貪欲は、偶像礼拝だと言われています。むさぼる思いは、神の戒めに背くことを欲することは、まことの神を神とせず、虚しい偶像を拝んでいるのと同じなのです。

ということは、これに対抗する道こそ、まことの神さまを、神として礼拝することです。

神さまを礼拝することによって。そこで、わたしたちが、イエスさまによる罪の赦しを宣言され、神さまの愛の御言葉を聞き、聖霊に新しくされることによって。わたしたちは、はじめて、罪に敵対し、戦っていくことができるようになるのです。

わたしたちは、自分の力で、罪に敵対し、戦い、勝利することは出来ません。

でも、わたしのために、十字架で死に、復活し、罪に完全に勝利してくださったイエスさまが共にいてくださるなら。わたしたちは、イエスさまの勝利の確信のもとで、目の前のあらゆる罪に敵対し、抗い、戦っていくことができるのです。

罪と死に対するイエスさまの勝利は、今はまだ、世のすべての者に知らされているわけではありません。でも、終わりの日には、すべての者に、完全に明らかにされます。

ですから、先にその勝利を知らされているわたしたちは、その日が来るまで、その勝利を世に告げ知らせつつ、勝利者であるイエスさまの御許で、守られつつ、導かれつつ、神さまを礼拝し、神さまの御言葉に従う道を、喜んで、自由に選びとって、歩んでいきたいのです。

また、わたしたちの主が、まことの神であってくださるなら。わたしたちは、隣人と共に生きる道も拓かれていきます。わたしを支配する、主であるお方が、わたしたちに必要なすべてをご存知であり、それを与え、養い、守り、生かしてくださるのですから。わたしたちは、自分のために、隣人のものをむさぼる必要は、もはやないのです。

むしろ、わたしたちは、共に神さまに愛され、共に生かされている者として、神さまから与えられた恵みや賜物を、喜んで、惜しみなく分かち合っていくことができる。そのことによって、隣人と共に、ますます恵み豊かにされていく。そんな道が、拓かれていくのです。

このように、神さまを礼拝し、神さまをまことの神として、主として生きるところに、神さまとの恵みの交わりも、隣人とのよい関係も、築かれていきます。

わたしたちは、それでも中々、心にある「むさぼり」の思いを、すぐに消し去ることは出来ないかも知れません。

でも、わたしたちは、もうイエスさまによって、それらの罪も含めて、すべてを赦されています。新しくされています。今ここで、すでに、神さまを礼拝し、神さまと共にいます。

わたしたちは、罪の支配の中ではなくて、神さまの愛のご支配の中に。イエスさまの勝利のご支配の中に、あるのです。

この恵みが、わたしたちを変えないはずがありません。

わたしたちは、神さまを礼拝して生きる中で。神さまと共に生きていく日々の中で。神さまから愛されていること。すべての必要を満たされ、豊かであること。本当の幸いとは、どのような時も、神さまが共にいてくださることである、ということ、身をもって、心から、知らされていくのです。

そして、その豊かな恵みが、わたしたちを、ますます、神さまを求める者へ、神さまを愛する者へと、変えていくのです。

## 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちの心の底まで、よくご存知であります。わたしたちの「むさぼり」の罪を、あなたは、ご覧になられます。

しかし、神さまは、御子イエスさまの十字架と復活によって、この罪を赦してくださり、神さまと共に生きることをこそ、求めよと、御許に招いてくださいました。そのことを、あなたが、わたしたちに求めてくださいました。

どうか、わたしたちが、その神さまの思いに、お応えすることが出来ますように。

そして、神さまの愛のご支配の中で、神さまを礼拝し、神さまを主人とし、神さまの御心に従って、歩むことが出来るようにして下さい。

罪と死に勝利して下さったイエスさまが、いつもわたしと共にいてくださり、わたしたちが、罪に敵対して、神さまを愛し、隣人を愛する道を、求めていくことが出来ますように。

このお祈りを主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 297 「栄えの主イエスの」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン